

京のお地藏さん

大津市プラごみ削減勉強会 会員
元横浜市職員 吉岡 俊雄

「鴨川の恵み」シリーズは、京都市民の暮らしと鴨川の恵みから始まり、次第に鴨川の源流ともいえる琵琶湖疏水に到達した。内陸都市では珍しく先端技術が発展し、日本で初めての水力発電や、それに伴う市電開通など多くの先駆的な取り組みが功を奏し、世界でもまれな文化・学術都市と先端技術がコラボした「古都」の素顔を紹介した。

今回は、この古都の文化を支えてきた寺社仏閣にあって、地域文化に根付き、発展してきた「地藏文化」を取りあげていただいた。

（『環境施設』編集委員会副委員長 鍵谷 司）

1. 地藏巡りのきっかけと地藏信仰

私の最寄り駅から一つ先に京都地下鉄六地藏駅がある。それどころか、JRにも京阪宇治線にも六地藏駅があり、この辺は地名も六地藏である。それは、近くの大善寺に六体の地藏が最初に祀られたことに由来することが分かった。そんな些細なことがきっかけで、京都の六地藏と醍醐の地藏を訪ねることにした。少しだけ付言すると、私は宗教に批判的な考えを持っているし、宗教に対する理解も不足していると思う。宗教に対する厳しい評価も見聞する。一方で、真に人に寄り添う宗教者も多いであろうし、平和を希求する宗教者もおられる。ここでは様々なことを脇に置いて、素直な心で、平和や心の安寧を求める人々の心持ちを尊重し、信仰の一端を見ていきたい。

平安時代の貴族（歌人、漢詩人）^{おののたかむら}小野篁が死後の世界から仏に導かれ現世に回帰したことへの感謝として、一木から六体の地藏菩薩像を作り、この大善寺に奉納した。後に白河上皇の勅命^{ちよくめい}により

平清盛が京都の六道を守る要衝に地藏堂を建て地藏菩薩像を分散安置したという。京の六地藏に因む寺を訪れると概ね同様の案内であるが、一木からあの大きさの六体の地藏を作れるとは思えないし、1,200年を経たこの時代の仏像が京都郊外のこれらの寺に残っていることも考え難い。このことの真偽についても脇に置いて、毎年8月22・23日に行われる六地藏巡りがにぎわうこと、京都の人々の地藏信仰が篤い^{あつ}ということを改めて思った。

まずは、地藏信仰である。平安時代、政情不安の中に在って、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道を巡る六道輪廻転生の末法思想が広がったという。また、人は、殺生をしなければ生きてはいけなし、罪を負っているという思いの人も多いであろう。そのため人は現世利益と同時に死後の安寧を望んだのであろう。ギルガメシュ叙事詩にも地獄の概念があるという（もっとも仏教の言う地獄とは違い、叙事詩の言う地獄とは死後の世界のイメージの様であるが）。死後の世界に対する思いには共通するものがあるのかも知れない。

私には次のことも良く分からないのだが感想を述べてみたい。地藏も観音も菩薩である。如来信仰、観音信仰、地藏信仰は、時代と地域によりさまざまであろうし、同時に幾つもの信仰を持つ場合もあろう。ただ、西國三十三観音とか、長浜市の「高月観音の郷」のように、観音信仰の方がきっちり^{きっちり}と形が整っているようにも感じられる。

一方、地藏信仰は、庶民的で、寺や宗教の範疇から外れ、素朴に祈られてきたようにも思える。お地藏さんが道端や野にたたずんでいることから感じることも知れない。中には、壊れた五輪の塔

に前掛けをかけていたりして微笑ましいものも見受けられる。

六道輪廻思想の六道の名は、六体地蔵^{ひてい}に比定されることはない。個々の地蔵菩薩像には、子安、水子、養育、汗かき等と名付けても、六体地蔵のそれぞれに名前を付けたものはあまり見当たらない。次に六という数字であるが、これは陰陽五行のような中国の思想の影響が大きいのではないだろうか。六体地蔵、六地蔵はもとより、六角の地蔵堂、六面の石塔、六面幡と何れも六と結び付けているのが面白い。

京都にどれ程の地蔵尊像があるかははっきりしないが、一説には4,000体ともいう。京都の地蔵尊像のデータベースを作ったアマチュアは3,500体を収録したという。また、近年作られた像をかなり見かけるので、4,000を相当上まわると思われる。その中で私が触れた地蔵尊像は、ほんの一部にすぎないが、京都の六地蔵を訪ねた後に私が巡り合った醍醐の地蔵を紹介してみたい。

2. 京の六地蔵

①奈良街道 大善寺（浄土宗 伏見区桃山町西町）

大善寺は、山科、宇治、奈良への分岐点として賑わった所のである。

8月22日に大善寺を再訪した。六地蔵巡りについては何も知らなかったのので、参詣者で賑わっているのを見て驚かされた。地蔵堂が開扉され、堂に安置されていた六地蔵が祀られ、納札所が設けられていた。最初に六体の地蔵尊が寄進されたた



写真1 大善寺の六体地蔵尊 地蔵堂に安置されているようで、普段は拝観できない



写真2 大善寺地蔵堂

けの寺らしく、比較的広く、きれいに整備されている。古刹^{こさつ}の面影のあるお寺といえる。裏手には、墓地があり、無縁仏も供養されているのは優しいお寺だなあと感じられた。地蔵菩薩像は、他寺のものよりもやや小ぶりに思われるが、ふっくらとした像で着色が施されている（写真1・2）。

②東海道 徳林庵（臨済宗 山科区四宮町泉町）

京都の東の守りであり、東海道の守護神である。

庵というから、僧侶の住まいであろうか。小さいながら洗練された庭園と住居が門塀に囲まれてひっそりとしている。

境外通りに面して地蔵堂、石の六体地蔵、宝篋印塔が建っている。地蔵堂の内部は確認できなかった。南西角には「じぞう」と読める道標が少し傾いて建っていた（写真3・4・5）。



写真3 徳林庵の六体地蔵尊



写真4 六体地蔵尊の一体（愛らしい表情）



写真5 徳林庵の地蔵堂

③西国街道 浄禅寺（浄土宗 南区上鳥羽岩ノ本町）

西国街道は、近世の山陽道で、京都から大阪を通過しないで神戸方面に出る要路という。鳥羽地蔵とも称される。この付近に「地蔵」という地名はないけれどバス停は「地蔵前」で、町内会も「地蔵町内会」だそうで、「地蔵」の呼称は地域に根付いているようである。また、寺伝では、寿永元年（1182年）文覚上人開基とある。とすると、六地蔵の由来と時代が違い過ぎるのはいささか気がか

りである。本堂には本尊の阿弥陀如来立像が、観音堂には十一面観音立像が、地蔵堂には着色された地蔵菩薩像が安置されており、オールマイティーのお寺と言えようか。境内には、恋塚とも称される五輪塔と宝篋印塔がある（写真6・7）。



写真6 浄禅寺の地蔵堂



写真7 浄禅寺境内の石仏群

④丹波街道 地蔵寺（浄土宗 西京区桂春日町）

その名もズバリ地蔵寺であるが、地蔵堂はなく、像は真新しい本堂に祀られていた。六尺ほどか大型の像で白と極彩色に彩られていた。この像は、桂地蔵、姉井菩薩とも称される（写真8・9）。



写真8 地蔵寺の地蔵像（右から水子、子安、日比地蔵）



写真9 地蔵寺の本堂

⑤岡山街道 源光寺（臨済宗 右京区常盤馬塚町）

尼寺だそうだが、地蔵巡りの案内板があるのみで寺の由緒書きがなく、由来は不詳。地蔵堂には大きな木の絵馬が掲げられていた。本堂に福德観世音菩薩立像が安置されているほか、石仏や五輪塔がある。なお、この地は、常盤御前隠棲の地ということである（写真10・11）。



写真10 源光寺の地蔵堂



写真11 源光寺の山門

⑥若狭街道 上善寺（浄土宗 北区鞍馬口通り寺町東入ル上善寺門前町）

鞍馬口地蔵、深泥池地蔵、姉子地蔵とも。貞観5年（863年）円仁創建と伝わる。104代後柏原天皇の勅願寺（天皇の発願により建立された寺）である。そのためか、広い境内に玉砂利が敷き詰められ、山門も本堂も立派で風格があり、地蔵堂も再建間もないようである。観音堂には千手観音が祀られている。近くの上御霊神社は応仁の乱では、東軍が陣を構えたことから応仁の乱発祥の地とされている。それほど要衝の地であったということであろう（写真12・13）。



写真12 上善寺の地蔵堂



写真13 上善寺の石仏群

京都の六地蔵の寺を巡って、いずれも風格、情趣を感じられる良い寺院と思う。ただ、観光都市京都の有名寺院が数多くある中では無名の中小寺院と言っては失礼であろうか。地蔵巡りの日以外には参詣者の姿を見ることもなかった。それと、拝見できた地蔵尊像の極彩色の姿には、野仏を多く見てきたからであろうか、いささか違和感を覚えた。大きさに違いがあるのも伝承とは違うと感じた。今のところ京都の人に伺う機会がないが、

いずれ疑問点を解消していきたいと思っている。

3. 醍醐のお地藏さん

身近な醍醐地区（伏見区の醍醐、小栗栖、石田、

日野の4地区）の地藏さんを巡り歩いてみた。お世話をする方が、横峯地藏尊については、醍醐寺近くの登山道から1時間の山道を歩いて登ってくるという（写真14～25）。



写真14 横峯地藏尊（醍醐 醍醐山） 地藏さんは標高402mの横峯峠にいる



写真15 横峯地藏尊（醍醐 醍醐山） 大正時代に寄進された花立に生花が生けられていた



写真16 町のお地藏さん（小栗栖 小坂町）



写真17 西芳寺の地藏尊（小栗栖） 新しい石像。右手に錫杖、左手に宝珠のオーソドックスな姿



写真18 僧尊坊町の地藏尊（醍醐）



写真19 火防稲荷大明神の交通安全地藏（醍醐） 地元の方が子供たちの安全を祈念して建てたと思われる



写真20 外山街道町の地藏尊（醍醐） 寄進された石塔、提灯もあり、かなり立派な祠。ご近所の方がお世話していた

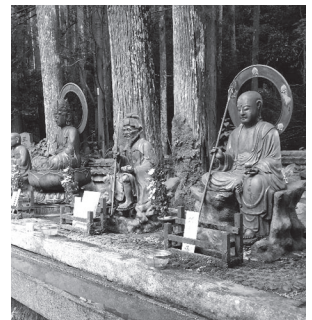


写真21 上醍醐寺・女人堂の石仏（醍醐） 右端が地藏尊



写真22 石田町墓地運営会の六体地藏（石田）



写真23 一言寺のびんずる地藏（醍醐）「びんずる」は梵語で、十六羅漢の第一尊者で人の病を自らが引き受けて治すと信じられている。一言寺は、一つの願いを叶える寺として信仰を集めており、地藏と共通する部分がある



写真24 日限地藏（醍醐 御霊下町） 日を限ってお参りすると願いが叶うとされている。公園の一角にある



写真25 四体の地藏と五輪塔（醍醐 大高町） 元は六体地藏ではないか。長い歴史の中で残存の四体が五輪塔と共にこの地藏公園に移されたと思われる

おわりに

歩いてみて感じたことをいくつか挙げてみたい。石仏の形は、通常の石像、石塊に陽刻、石板に陽刻、の3通りで、幡はなかった。寺院の境内の石仏は屋外に安置されているのに対し、街角の石仏は祠に納められ、その上に覆屋が掛けられていることが多かった。しかし、ほとんどの像が磨滅していることから、昔は路傍で地域や旅人を見守っていたのではないか。また、それが本来の信仰の形ではないかとも思われる。醍醐の石仏に関しては、ほんの身近な所を歩いただけだし、ここに紹介した石仏はほんの一部に過ぎない。しかし、これだけ多くの石仏が残され、大切にされている。信仰が篤いことに改めて驚かされた。

こうして歩いてみて、私の宗教観が変わったわけではない。ただ、人々が地蔵尊を大切にすることは、単に文化財を守るだけでなく、それによりこの世の平安や人々の健康を願い、自らも心穏やかに過ごしておられるのであろうことに思いを馳せた。地蔵尊像を訪ね歩いたことは、良き逍遙・探訪をしたものと思う。

高島市（滋賀県湖西地区）の60歳代の知人から地蔵に係る様々のことを教えて頂いたので紹介したい。この方が子供の頃、地域に地蔵堂があって、地蔵盆には子供たちがお供えのお菓子を持ち寄り、僧または地域のお年寄りが念仏を上げた後に数珠繰りを行った。数珠繰りは、房の付いた長い数珠を廻し房が自分の所に来ると捧げる。108回廻したようである。それが終わるとお菓子を貰って帰るそうである。

この方の親戚には、地蔵堂を守るお宅や、庭にお地蔵さんがあるお宅もあるという。随分身近な所でも地蔵信仰が息づいていることを知った。

【付記；地蔵盆とその由来】

「地蔵盆」は、京都市の「無形文化遺産」に選ばれており、今でも8月になると各町内で盛んに行われている。各町内には小さな「お地蔵さん」が祀られていて、いつも献花、水やお供えが絶えない。お地蔵さまは、子供の守り神であり、子供が

中心になってお地蔵様を供養するお祭りが地蔵盆であり、お寺に祀られたお地蔵さんではなく、街角や道端のお地蔵さんで、「辻地蔵」が対象である。

地蔵盆は、お地蔵さんの前や空き地などで行われ、お地蔵さんは、綺麗にお化粧され、周りに提灯が飾られ、お祭りの雰囲気である。大人や子供たちが集い、お菓子などが配られ、くじ引き、盆踊り、花火やカラオケなどで楽しみ、地域の懇親を深め、地区のコミュニケーションの場となる（写真A、写真B）。

ところで、仏教には、人が亡くなると、天道、人間道、修羅道、畜生道、飢餓道、地獄道の六つ世界のどれかに生まれ変わり、永遠に繰り返されるという「六道輪廻」の思想が在る。お釈迦さまは、この苦しみから人々を救うことを地蔵菩薩に託したといわれる。奈良時代に日本に伝わり、平安時代に地蔵信仰が広まり、鎌倉時代になると、「末法思想」が広がり、地蔵菩薩が、地獄では閻魔大王に変身して人々を救うと信じられたという。

一説によると、平安時代に活躍した小野篁（たかむら）が、地獄で出会った地蔵の姿を六体の地蔵像を造り、宇治の六地蔵におき、後に京に通じる六街道に移し、京への悪霊の進入を阻んだといわれる。これがはじめに紹介した六街道沿いのお地蔵さまと繋がる。

なお、小野篁は、平安時代の国の役人で、夜は、六道珍能寺井戸から地獄に通い、閻魔大王に仕えていたという。閻魔大王は人々を救う仏であり、驚いたことに「地蔵菩薩はその化身」とか？ 清水寺に行く途中の六道珍能寺には、あの世と行き来していた井戸が現存する。（大津市プラごみ削減勉強会アドバイザー 鍵谷 司）



写真A 近所のお地蔵さん
(京都市左京区岩倉)



写真B 地蔵盆の様子 (ネットより)